



- ・思考が深まるグループ編成を工夫する。
- ・本時の学びをキーワードや作文で振り返り、自身の変容・成長を自覚できるようにする。

#### <視点4：構造化した板書>

- ・学びの筋道を可視化できる板書により、思考の整理につなげる。
- ・板書が子どもの記録につながるように、ノート指導を継続する。

#### ④ 改善策が明確になる協議会

- ・授業者の提案と子どもの姿をもとに、各自が自己改善策を明らかにする。
- ・協議会を受けて、授業者と研究主任が授業の考察をまとめる。

### 《 研修日程 》

4月	・研修計画立案と方針説明 ・新潟県教育委員会「分かる授業づくり」、おぢやっ子教育プランの確認 ・授業チェックリスト作成（毎月末に振り返り）
5月	○5/25 2学年授業公開 中越教育事務所学校訪問（国語） 小・中連携プロジェクト公開授業
6月	○6学年授業公開
7月	○5学年授業公開 ○7/7 学習指導改善調査、終了後結果分析
9月	○3学年授業公開 《学習指導改善調査研究事業協力校授業公開》
10月	○1学年2組授業公開 ○10/9 学習指導改善調査市報告会にて取組発表
11月	○11/24 4学年授業公開 《学習指導改善調査研究事業協力校授業公開》 ○1学年2組授業公開
12月	○特別支援学級授業公開
1月	○学習指導改善のまとめ、研修の成果と課題 ・年間指導計画見直し

### (2) Web配信集計システム・月例テストの実施

- ① 定着状況の継続的な把握により、日々の指導法の改善につなげる。
- ② 全校テスト実施日を設定し、月暦・週暦に明記する。
- ③ 低学年は、担任が月例テスト（国語・算数）を作成・実施する。基準点に満たない場合は、補充指導実施により基礎学力を高め、意欲につなげる。
- ④ Web配信問題計画表をもとに朝学習等を活用した復習を計画的に行い、テスト・振り返りをする。昨年度の結果を踏まえて、単元に入る前に間違いやすい問題を把握し、指導に生かす。
- ⑤ Web配信集計システムの結果分析により、補充すべき内容を明らかにし、繰り返し指導する。サポート問題を確実に実施し、学習内容の定着を図る。また、結果を毎月家庭に知らせる。その際、子どもの努力と成長を保護者に伝え、次への意欲につなげる。

### (3) 中学校区の取組、朝学習等

- ① 小・中連携プロジェクトの取組として、家庭学習強調週間（6/11～6/18、11/5～11/12）を設定し、家庭学習の習慣化を図る。
- ② 基礎学力定着のために朝学習、朝読書（15分間）を計画的に行う。

## II 校内研修の取組から

### 実践1 5学年 国語「より楽しい千田小学校にする方法を考えよう

～ディベートで深めよう～」より

#### 1 授業改善の視点

どの学習においても多様な考えが出されるクラスである。算数などでは、計算の仕方について、教科書の例にはない考えが多く出される。また、多くの児童がその考えを理解できる。よって、2学期の学習内容であるが、ディベートという討論の形態を用いることは可能である。しかし、積極的に意見を述べようとする児童は限られている。自分の考えをノートに書くことはできているが、「間違えたらどうしよう」という思いを抱いている児童も多い。これは、「Q-U」における「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」質問5「授業中に質問に答えたり、発言したりするのは好き」で、他の質問より「とても好き・好き」の割合が低いことから分かる。（とても好き 28.6%、好き 33.3%）

そこで、本単元では、ディベートという形態を用いることで、全員が発言する機会と必然性をもたせたい。3～4名のチーム編成とすることで、苦手意識のある児童には得意な児童からアドバイスできるシステムを構築し、自信をもって発言できるようになることを期待している。

最後に、「より楽しい千田小学校にする方法を考えよう」と、いじめ見逃しゼロスクール集会に向けてアイデアを募った。そこでは、「①いじめをなくす」「②ロングの昼休みを増やす」「③給食のメニューを工夫する」の3つに意見が集中した。①は学級活動において話し合い、③はお金に関係してくることから、②を授業のテーマ（論題）とした。「ロングの昼休みを増やす」という論題について、賛成派・反対派に分かれてディベートを行うことにより、児童が自らの期待感や経験をもとに、活発な話し合いを展開するであろう。そして、普段はあまり発言しない児童が発言したり、自分の意見だけを述べて満足していた児童が、相手の意見を積極的に聞いたりする姿が見られるのではないかと期待する。

#### 2 研究の内容と方法

教科書では、「学校を百倍すてきにする方法」というテーマで、一人一人が自分の考えを提案する内容となっている。しかしながら、「百倍」の定義が明確でなく、「すてき」という言葉も児童はあまり使用しない。そこで、「より楽しい千田小学校にする方法を考えよう」というテーマで学習を進めることとする。それは、「いじめ見逃しゼロスクール集会」に向けた学級での話し合いのテーマでもあった。その際、数々の提案がなされたが、同じようなアイデアが多く出された。教科書の計画にそって一人一人が自分の考えを提案した場合、同じような提案が繰り返されるという懸念がある。児童は、昨年度の総合的な学習の時間における「2分の1成人式」、今年度の自然教室などでも、一人一人がやってみたいことを提案する活動は数多く経験してきた。

そこで、本単元では一方的な提案ではなく、多くの児童から出された一つのアイデアについて、全員で話し合う形態（ディベート）で学習を進めることとする。ディベートという手段を用いるのは、小学校学習指導要領・国語の第5学年及び第6学年「A 話すこと・聞くこと」の指導事項「ア 考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報に関係付けること。」「エ 話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。」「オ 互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。」をまとめて取り上げて指導することができると思ったからである。また、グル

ープを編成し、仲間と関わることにより、自信をもって自分の考えを公表できるのではないかと考えたからである。さらに、ディベートでは、相手の意見に対して、反論することが重要である。聞くことの必然性が生まれ、より集中して聞くようになり、また、メモの仕方の技術などを高めることができると考えている。

### 3 実践の概要

(1) 単元名「より楽しい千田小学校にする方法を考えよう  
～ディベートで深めよう～」 (5/7時間)

(2) 本時のねらい

1回目の振り返りを生かしたディベートを通して、理由を明確にして話したり、自分なりに工夫して聞いたことをメモしたりすることができる。

(3) 研究主題に迫るための手立て

① 本時のねらいの明確化と発問の焦点化

前時の振り返りをもとに、自分なりの課題をもってディベートに取り組む。聞き手に伝わるような声で話そう、後から見て分かるメモを書こうといったことである。その時間を確保することにより、本時における表現活動がより充実したものになるであろう。それができることが表現する自信につながり、今後の課題も明確になる。

② 思考を深める言語活動

通常よりも多めに作戦タイムを設定する。グループでの話合いで、全員が現在の状況を理解できるようにする。審判グループは双方の意見をまとめ、どちらの主張が説得力をもつかを話し合う。グループ内での関わりを通して、話合いの内容の理解を深めるようにする。このような活動を通して、思考を伴った言語活動が展開されると考える。



### 4 成果と課題

(1) 成果

① ほぼ全員が話し合いを振り返るメモを作成することができるようになった。(記録用紙による評価より)

② 相手に伝わるように、自分の考えを述べるようになっていく。(ボイスレコーダーによる評価より)

③ 自分の思いと反対の立場に立つことにより、多様なものの見方ができるようになったと思われる。(立論用紙による評価より)

④ 自分たちで決めた題材「ロングの昼休みをふやす」についてディベートを行うことにより、意欲が継続した。よい題材であったと考える。

「ディベート」は、「話す力」「聞く力」を同時に高める活動である。これまで未経験であった「自分の考えと反対の立場に立つ」ことで、多様なものの見方ができると思われる。

(2) 課題・今後に向けて

① 一人一人の評価が記録用紙中心で、「話す」ことを見取るのが困難であった。ボイスレコーダーを評価に活用したが、機械から聞こえる声だけでは相手にどのように伝わったか分かりにくかった。タブレット端末などで映像も残すと評価がしやすくなるのではないかと感じた。

② 児童による判定が難しかった。いっそう分かりやすい判定基準を示す必要があった。「メリット・デメリット方式」というやり方がよいと学んだ。



### 1 授業改善の視点

元気のよいクラスで、自分の思っていることや話したいことを進んで話そうとする子どもが多い。中には、話すことに抵抗感をもっている子どももいる。帰りの会では「今日楽しかったこと・がんばったこと」「当番のキラリ」のお話コーナーを設け、一日を振り返り、自由に話せる機会をつくっている。

「大事なことを聞き落とさないようにしながら、興味をもって聞く」学習として、1学年「こんな石を見つけたよ」の単元では、友達が石のどんな特徴に着目して名前を付けたのかを聞く経験をした。全員が自分の見つけた石の紹介をし、どの子どもも興味深く話を聞くことができた。自分の興味のある話題に対しては、目を輝かせて聞き入るが、興味のない話題や聞く時間の延長により、集中して聞くことが難しくなることがある。

### 2 研究の内容と方法

本単元は、第2学年での最初の「話す・聞く」領域の学習である。「話すこと・聞くこと」は、学習活動を進める上で、また日常生活を円滑にする上で大切なことである。本教材は、「迷子探しをする」というゲーム的な言語活動への取組を通して、「楽しみながら大事なことを落とさずに話したり聞いたりする力を身に付ける」ことをねらっている。

迷子を探すために、迷子の特徴となる大事なことを落とさずに聞いたり、迷子を見つけるために大事なことが伝わるように話したりしなければならない。アナウンスの仕方にも、声の大きさ、話す早さ、間の取り方、丁寧な言葉遣いが期待できる。

その後、「連絡ゲーム」を行う。子どもたちにとって日常的な場面を設定し、持ち物を連絡し合う活動である。ここでは、単語レベルでのメモの取り方にも触れ、日常生活の中で実際に活用できる力を身に付けたい。「遊園地の人混みの中から迷子を探す」という状況を設定し、「話すこと・聞くこと」の学習を進める。雑然とした絵の中から、迷子を探すという状況は、子どもたちにとっては「探偵気分」で、興味のわく活動であるとともに、「何が分かれば迷子が見つかるか？」という目的意識をもちながら、意欲的に「話す・聞く」活動を繰り広げることができると考える。また、性別、服の色、持ち物など、人物の特徴に関する様々な情報を、整理・分析しながら、話したり、聞いたりすることが期待できる。

話す・聞く活動は、目的があり、相手がいる、初めてコミュニケーションとして成立する。子どもの目的意識、相手意識を明確にし、状況を適切に設定しながら、伝え合う喜びが味わえるようにしていきたい。

### 3 実践の概要

- (1) 単元名「だいじなことをおとさずに、話したり聞いたりしよう ～ともこさんはどこかな～」(1 / 5時間)
- (2) 本時のねらい  
絵の中の人物を探す手がかりとなる大事な事柄が分かり、それを落とさずに聞くことができる。
- (3) 研究主題に迫るための手立て



○ 視点1：授業の導入の工夫

教科書では、「迷子のお知らせを聞いて、とも子さんを探す」活動から入り、「とも子さんを見付けるとき、どんな言葉がヒントになったか」大事な言葉を話し合う授業構成になっている。しかし、本時では、子どもの興味関心や学ぶ意欲を引き出し、「問い」が生まれるように、授業の導入時に「名前だけの情報」を与える。子どもたちからは、「え？」という声が聞かれるであろう。どんな情報があればとも子さんを早く見付けられるか、子どもたちに「手がかりとなる大事なこと」を考えさせたい。

○ 視点2：本時のねらい（課題）の明確化と発問の焦点化

子どもたちから出された「え？」が、本時のねらいとなる。子どもたちの意識が向いたときに「学習課題」を提示する。

○ 視点3：思考を深める言語活動

「手がかりとなる大事なこと」を話し合い活動に設定し、情報を一つずつ整理していく。聞き手にとっては、「もっと聞きたい」という気持ちを高めたり、次に何を聞いたらよいのか思考を深めたりする姿が期待できる。

○ 視点4：構造化した板書の工夫

子どもが考えたことやつぶやきを残し、思考や学習の流れが分かる板書を目指す。



#### 4 授業実践を通しての成果と課題

##### (1) 成果

###### 授業の導入の工夫

授業の導入は、「迷子捜しで名前だけの情報」を与えた。子どもたちから、「え？分かんない。」「何歳？」という「ハテナ？博士」の声が聞かれた。子どもたちから「聞くための観点」が明確に質問された。子どもの追求意欲を喚起できた。

###### 構造化した板書と教材

子どもの考えやつぶやきを残し、思考や学習の流れが分かる板書を心掛けた。時間の無駄をなくすために迷子表を作成し、本時のねらい「大事なことを落とさず聞くことができる」ように板書を工夫した。聞く意欲を高めることができた。



##### (2) 課題・今後に向けて

###### 考えさせる場面

迷子探しメモは、スモールステップで段々難しく工夫したが、子どもたちにとって必要性がなかった。また、学習活動が同じことの繰り返しで、飽きてしまった。

深める時間の活動は、不十分な情報で子どもたちが困る状況に追い込み「大事なこと」を考えさせる場面が必要であった。また、個の意欲に応じたメモの選択をさせるべきであった。

###### 子ども同士のかかわりを増やす

学ぶ意欲を引き出すためには、「伝え合う活動」が大切であった。困る状況に追い込み「あれ？どっちの人だろう？」と悩むアナウンス内容であったら、ペアで相談が始まったり、その人を選んだ理由を説明したりと、子ども同士のかかわりを深めることができたのではないかと考える。今後は、友達同士で答え合わせをしたり、相談したりする時間を設定し、ペアやグループで話し合う活動を充実させていきたい。

### 1 授業改善の視点

本単元「ゴムのはたらき」は、身近な教材であり、「どうすれば車をもっと遠くまで走らせることができるか」という明確な課題は、児童にとって分かりやすく意欲を高めることができると考える。ゴムの働きに対する既存のイメージ・素朴な概念を学習活動の中で新しいイメージ・概念に変えることも理科としての楽しさにつながるのではないかと考えた。

### 2 研究の内容・方法

本単元「ゴムのはたらき」において、構造化された板書を目指し、視覚化していく。具体的には、実験結果を「cm」で測り記録することは、予想を確かめたり結果を比較できたりし、数値として分かりやすくする。また、子どもたちがスムーズに「実験・記録・考察→実験・記録・考察」の流れを作って活動し、見通しをもって学習できるようにしたい。

さらに、結果から分かったことを書き表しながら友達と交流することにより、友達の思考のつながりが分かる。これらのことは、実験結果から考察し、ゴムの働きについてまとめるときに手掛かりになると考える。

2次では、1次の実験やまとめからゴムののびと本数を変えることにより、自分たちの力で課題を解決していく。「ゴムの力で車をゴールに止めよう」という、身近な課題を解決するために繰り返し実験する過程で、結果を記録したり友達と相談したりする活動が自然に行われると考える。車をゴールに止めたいという児童の思いを、意欲的な学習活動へつなげたい。

### 3 実践の概要

#### (1) 単元の目標

ゴムを引っばったり、ねじったりしたときの物の動く様子を比較して、それらについて予想や仮説をもつ。そしてゴムがものを動かす働きについて調べ、見出した問題を興味・関心をもって追求する活動を通してゴムの働きについての考えをもつことができるようにする。

#### (2) 単元の指導計画

次	時	学習活動	評価【評価観点】
1	1	<b>ゴムの力で車を走らせよう</b> ○ ゴムの力で動く車を作って、走らせる。	○ ゴムの力を働かせたときの現象に興味関心を持ち、進んでゴムの働きを調べようとしている。 <b>【自然事象への関心意欲・態度】</b>
	2	○ どうすれば、車をもっと遠くまで走らせることができるか考える。	○ ゴムののびや本数に応じて車の走る距離がどう変わるか予想することができる。 <b>【科学的な思考・表現】</b>
	3 4	○ ゴムののびや数を変えて車の走り方を調べる。	○ 実験器具を安全に正しく組み上げて調べたり、その結果を記録したりすることができる。 <b>【観察・実験の技能】</b> ○ 実験結果から考察し、ゴムののびや本数によって、車の走る距離が違うことを理解している。 <b>【自然事象についての知識・理解】</b>

2	5	ゴムの力で車をゴールに止	○ ゴムの働きを利用して車の走る距離を考え、ゴールに止まるようにゴムののびや本数を変えて実験することができる。 <p style="text-align: right;">【科学的な思考・表現】</p> ○ ゴムののびや本数によって、車の走る距離が違うことを理解している。 <p style="text-align: right;">【自然事象についての知識・理解】</p>
	6	めよう ○ ゴムののびや本数を変えて車をゴールに止めよう。	

#### 4 成果と課題

視覚的に見やすく、分かりやすい板書や説明により、児童は意欲的に学習課題に取り組んだ。また写真を取り入れたり、導入で実験の判定方法を明確にしたりすることにより、活動がしやすく、意図をもって次の方法を考える姿が見られた。それは、うまくゴールに止めることができなかつた時に、2人で悩み話し合っている児童の姿が見られたことから分かる。自分の考えに固執せず、2人で考え、ゴールに車を止めるための工夫を続けていた。

学習形態が有効に働き、ペアでの実験や十分な学習の場の確保によって、児童の思考を促すことができた。結果を記録するワークシートや作戦タイムを設け、次はどうか話し合う時に児童は集中して取り組んだ。

「次の実験への手がかりとなる記録（ワークシート）→考察（作戦タイム）→実験」という学習の流れが児童の中で自然とできていたと考える。

ペアでの話し合いの可視化の工夫と情報交換の場の設定が課題である。ペアでの学習形態においてどのようなことが話し合われて、次の実験につながったのか全ての班を見ることができなかった。そのため記録用のワークシートに理由を書く欄を作るなどの工夫があるとよかった。またペアでの話し合いを全体で共有する場の設定も必要である。個人やペアで自分の考えを表現し、表現したいものをさらに全体に広げる言語活動を、今後の学習で組み込んでいきたい。



また、2次の実験結果が全部×だったペアがいる。○か×かの結果だけでなく、「何cm超えた、何cm足りなかった」などと表現したり、車が止まった位置でポイント制にしたりすると、どのペアも達成感を味わえたのではないかと考えている。

単元の終末部分において、まとめをどのようにするかも



ゴムの2人で車をゴールに止めよう		○	×	→ ×の理由
①	②本 10cm	×	ゴールをこえた	ゴールをこえなかった
②	③本 10cm	×	ゴールをこえた	ゴールをこえなかった
③	②本 5cm	○	ゴールをこえた	ゴールをこえなかった
④	②本 13cm	×	ゴールをこえた	ゴールをこえなかった
⑤	②本 12cm	×	ゴールをこえた	ゴールをこえなかった
⑥	②本 11cm	○	ゴールをこえた	ゴールをこえなかった

＜今の様子＞ \*ゴールに止まったら○を書く

課題である。本時のように、「ゴムのはたらき」について明らかになったことを次の実験にどう生かし、どうまとめるか、児童に付けた力と合わせて明確にしていきたい。

### III 今年度の成果と課題

#### 1 校内研修

##### (1) 成果

###### ① 日々の授業改善

公開授業後に授業チェックリストを活用し、自分の授業に生かせること（自己改善策）を書き出した。様々な授業を目にししながら授業づくりについて考えたことが、私たち自身の授業改善への意欲につながっている。



###### ② 公開授業

「学ぶ楽しさを感じ、意欲的に考え表現する子どもの育成」の研究テーマに向けて、以下の4視点から具体的に目指す子どもの姿や身に付ける力を明らかにして授業に臨んだ。

- 視点1：本時のねらいの明確化と発問の焦点化
- 視点2：授業の導入の工夫
- 視点3：思考を深める言語活動
- 視点4：構造化した板書の工夫

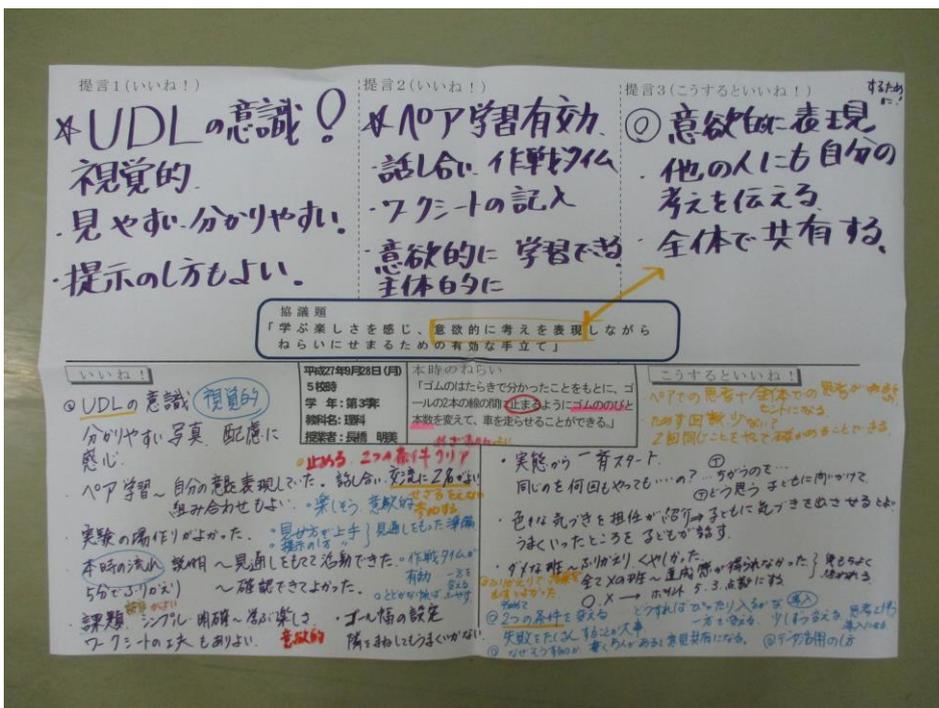
子どもにとって身近な内容が題材とされ、視覚的に訴える写真・絵カード、教科書拡大図等の使用も積極的に行われた。参観者も、見る視点を明確にして授業に臨んだ。KJ法やワールドカフェ方式を取り入れた協議会では、成果と改善策について積極的な議論が展開された。大洋紙に記録しながらの協議を受けて、研究主任が研修だよりの

発行を続けた。

授業研修の積み重ねが、教員一人一人の意識の高まりとなり、「学ぶ楽しさ」「意欲的に表現する子どもの姿」につながっている。

年度末学校評価において、「学校の授業が楽しい」と回答した児童が92.9%（A評価）となった。

←協議会グループ記録から



## (2) 課題

学ぶ意欲を引き出し、子どもの表現力をさらに高めるために、以下の課題が浮かび上がっている。

子どもの思考を十分深めるための ①場の設定 ②発問 ③言語活動（伝え合う活動）について研究を続けること。

## 2 Web配信集計システム・月例テスト

### (1) 成果

- ・ 毎月の結果分析により、補充指導事項や指導の視点が明らかになった。各教室で、確認問題等を活用した指導を繰り返し行い、その積み重ねが児童の正答率の上昇につながってきた。年度末学校評価において、「学校の学習内容が分かる」と回答した児童は 94.3%（A 評価）となった。

### (2) 課題

- ・ 過去問題やサポート問題の活用をさらに進めること。指導の重点箇所を読み取り、学習に軽重を付けながら指導を進めること。結果分析をさらに授業実践につなげること。

## 3 中学校区の取組・朝学習等

### (1) 成果

- ・ 朝学習時に、家庭学習の確認、漢字計算ミニテストを実施したり、朝読書（15 分間）を実施したりすることにより、基礎学力定着に効果が上がっている。朝学習の計画的な運用が進んでいる。
- ・ 中学校区の学習習慣定着の取組を継続し、計画的な発信と評価により、家庭学習の定着率を上げることができた。年度末の学校評価において、「月～金曜日の家庭学習を学年×10 分間している」と回答した児童が 91.5%（A 評価）となっている。

### (2) 課題

- ・ 身に付けるべき学力について小・中学校 9 年間を見据えて考察し、家庭学習の内容・質の深まりにつなげる。
- ・ 新おちやっ子教育プラン（平成 28～30 年度）では、学校の役割を以下のように明示している。これを学校のグランドデザインや中学校区の取組に反映し、学力向上に係る取組・評価を計画的・組織的に進めようと考えている。

- 子どもが主体となる活動の推進に積極的に取り組み、子どもの可能性を伸ばす。
- 子どもの不安や悩みに丁寧に対応し、満足感、達成感のある学校を目指す。
- 仲間との関わりを大切に社会性を育み、人間的成長を促す。
- 分かる喜びや学ぶ楽しさを通して、学習意欲を高める。

